夏季仏教講座　帰命塾

ーなぜ名号が救いかー　『仏説無量寿経』を読む

■ 日　時　　2019年8月23日(金)13:00受付　14:00開会
　　25日(日)15:00閉会

■ 会　場　　正定寺　　お寺と温泉は車で5分、往復送迎あり。

■ 宿　泊　　山田温泉ゆぽっぽ　889-4602　都城市山田町中霧島3340－2
　　0986-64-3711　http://www.yupoppo.com/

■ 講　話　　尼子　玄章　正定寺住職
　世話人　　吉冨あつ子・松林淳子・福留みほ子・正定寺門徒＆スタッフ

■ 定　員　　宿泊者12名　と　通い参加(地元)

■ 内　容　　講話　＆　座談　＆　親睦交流

日　程	9:00～12:00		14:00～17:00		19:00～21:00
23日	13:00　受付		講座　1	夕食	自由座談
24日	講座　2	昼食	講座　3	夕食	自由座談
25日	講座　4	昼食	講座　5	15:00　閉会	

全席イス式。　研修会場のほかに、午睡や休憩の部屋もあります。

■ 宿泊費　　1泊1室2名のときひとり　宿泊のみ　5,400円　朝食付　6,230円

■ 参加費　　昼食(1000円位)、夕食(1500円位)　実費の自己負担です。

■ 申込み　　「参加申込書」に記入し、郵送ハガキまたはFAXでお申込み下さい。

■ 〆切り　　8月10日(土)　通い参加の人も申込みをしてください。

■ ご案内　　「ゆぽっぽ」は、霧島連山を一望できる人気の高い温泉です。
　参加申込者に、「ゆぽっぽ」のパンフレット＆料金表を送付します。
　「ゆぽっぽ」への宿泊予約は主催者がします。

　1)　九州自動車道の高原ＩＣより車で２０分。
　2)　ＪＲ西都城駅よりＴＡＸで１５分。
　3)　新幹線・新八代駅～高速バス・都城北ＩＣ～ＴＡＸ１５分。

■ メ　モ　　小規模ゼミですから、参加者も世話人と一緒に運営しております。
　式章・念珠・勤行聖典をご持参ください。

■ 発　信　　〒889-4601　都城市山田町山田3887　浄土真宗本願寺派　正定寺
　(問合せ先)　TEL＆FAX　0986-64-2078
　携　帯　090-8622-8924
　Mail　kohuusya@yahoo.co.jp
　https://amidanet.sakura.ne.jp/

ご案内

■　昨年の夏、初めて講座に加えていただいて、一年が経ちます。先生は体調の勝れない中で、私共の為に真摯に道を説いて下さいました。迷いの人生の中で、確かなもののある事をお教えいただき、やっと自分を肯定出来、日暮らししております。毎日先生の法話ＣＤを聴きながらの畑仕事。畑仕事のない日は、先生の著書『自己とは何か』を読みながらの日々に、これ以上のない幸せを感じております。皆様にお会いできる日を楽しみに致しております。合掌　　松林　淳子

■　「念仏をいただく」とは、どういうことか ‥‥ 長い間、実感の涌かぬまま、中央仏教学院通信教育で学び、お寺での聴聞に励んできました。「良か話じゃった！」とよろこびながらも、すぐに話の内容を忘れる、の繰り返しでした。

尼子玄章先生との出逢いと昨年の夏の講座を通し、自然に身構えることなく、お念仏が声となって出てくださるようになりました。私の心に、「仏様からずっと願われ続けていたんだ。あれやこれやと思い悩むことはなかったんだ。ちっぽけな人間世界を超越した仏様の世界から、とっくに許されて今ここにあるんだ。そして、やっと『そうでありました』と念仏をいただける身になったんだ」というよろこびと感謝の念が涌きました。テレビからは暗いニュースが流れ、人々の会話もなんだかグチが多いように思います。反省するポーズをとるお猿さんはいましたが、過去を悔やむ犬、将来を憂う猫、悩み深き花等は見たこともありません。

私も自然の中の生き物のひとり。ゴチャゴチャ文句を言わず（言いたい時もありますが）生きている今を大切に、念仏と共に精一杯生き抜きたいと思います。

「正定寺夏休み子ども寺子屋」にも、小林市とえびの市の小学校に通う孫３人といっしょに参加します。校区を問わず参加を快諾いただき孫共々に楽しみにしております。「夏季仏教講座」にはスタッフでお手伝いできることも大変ありがたく、うれしく思います。合掌　　福留みほ子

■　尼子玄章先生との初めての出会いは、１９７８（昭和５３）年８月、東京カウンセリング研修センター（岩下榮次先生）主催のカウンセリング研修会（長崎・雲仙会場）です。その時からほぼ毎年、春・夏・秋のカウンセリング研修会のたびにお会いし、お導きいただきました。

その後、尼子先生が宗教哲学者・大峯顯先生を人生最後の師として師事され、多くのカウンセリングの友もこの航路選択に参加していきました。尼子先生は、２００６年から２０１５年までの１０年間、毎年６月に、霧島温泉・旅行人山荘を舞台に「大峯顯先生　宗教哲学講座２泊３日」を主催され、全国からたくさんの法友が集いました。私も念仏の大河の流れに誘われるように、うれしく身を運びました。ところが２０１８年1月３０日、大峯先生（享年９０才）は突然往生され、ポッカリと心に空洞ができました。こんな気持ちのままでいたくない、大峯先生からいただいたお念仏の灯火を消したくないと思っていた心が尼子先生に届いて、昨年「夏季仏教講座」を開いてくださることになりました。そして今夏、第２回目の開講です。

尼子先生の言葉は、ときに思いがけない角度から胸に飛び込んできて、どすんと落在します。「科学は、自己の生き方や感情を交えず、対象を客観的にむこうに置いて研究する三人称の学問です。仏法は、一人称の自己の全面的な丸ごとの救いの問題です。仏様はわたしに成りきって、わたしを救うのです。阿弥陀様は煩悩のままのわたしの中で、阿弥陀様に成られるのです。その姿は、ただ念仏、声に成られた永遠の仏様です」‥‥‥　お会いするたびに何度も何度も聴かせていただき、いつからか独りのときお念仏申せる私に成らせていただきました。

「あのね、仏法聴聞には頭はいらんのよ。おぼえんでもよろしい。念仏申せ、それだけ」、「南無阿弥陀仏はね、永遠のあなたご自身の名前なの」、「世界中に神も仏も無数におられますが、名前（南無阿弥陀仏）をとなえたら自分（阿弥陀仏）を全部今やろうと誓われた気前のいい仏様は阿弥陀様だけ、これが世界中の宗教の最終究極完成の決着なんだ」と、‥‥ときには理路整然と論理を語り、ときにはやさしいポエムに成って「あっ、そうだったんだ」と私の心の在処を知らしていただき、ときには現代人の既成観念をやぶる鋭い言葉が到来する不思議な宇宙人。この方の言葉はどこから来るのかしら。その言葉が胸に響いて、すこっと落ちます。

今夏も正定寺の皆々様にお世話になります。お陰様で素敵なお寺様に入り浸って深呼吸をさせていただきます。「ゆぽっぽ」も安価で、参加者みな助かっております。合掌　　吉冨あつ子

ーなぜ名号が救いかー　『仏説無量寿経』を読む

尼子　玄章

釈尊（ブッダ）から親鸞聖人（1173～1263）に到る浄土真宗の歴史は、浄土経典とりわけ『仏説無量寿経』（以後、『大経』と表記）をどのように自己救済の根源の言葉として領解するかという解釈の歴史です。その孤独な苦闘は、龍樹・天親・曇鸞・道綽・善導・源信・源空の七高僧と親鸞聖人までで完結したわけではありません。『大経』は、いつの時代も未読の経典なのです。

親鸞聖人は、主著『教行信証　教巻』において、「それ真実の教をあらわさば、すなわち『大無量寿経』これなり」とのべていますから、我らもまたどのような形であれ、『大経』解釈の伝統に参加しないわけにはいかないのです。だからと言って、僧侶も門徒もみんな仏教学者のような知識人にならねばならないと主張するものではありません。昨年の「第一回夏季仏教講座　～『大経』の根本問題～　」では、神（絶対者）の宗教（キリスト教）の救済と、法華経・華厳経を中心とする大乗菩薩道仏教の救済、そして『大経』を中心とする浄土経典の阿弥陀如来の救済の特徴と相違を解説することから始めました。今夏もまた簡潔に振り返ることになるでしょう。

ただ、テーマに「『仏説無量寿経』を読む」と掲げたからといって、経典の言葉を順をおって解説する眠たい講座は有害無用です。門徒も仏教語解説の説明仏教には、もうあきあきしているのではないでしょうか。説明仏教は、別名カタログ仏教です。リンゴの写真を見せてリンゴを食べたと思わせる詐欺商法です。自動車学校に２０年も通ったけど、まだ教習所の中でしか運転できないのであれば「一生仮免許」、立派な詐欺です。お寺に何十年も通ったけどお寺の中でしか念仏がでないのであれば、「一生カタログ仮免許」の味知らずです。これは作為的犯罪ではないが、自己と門徒に鈍感不誠実であるが故の詐欺です。僧侶の恐ろしい罪ではないでしょうか。

インド仏教では、帰依する経典を定めて教義を構築する「経典宗派」は生まれませんでした。法華宗（法華経）、華厳宗（華厳経）などインドから到来した経典を選択判別して、その優劣を独自に見定め「経典宗派」が誕生したのは中国仏教からです。この時、浄土経典は発心出家しても修行を完成できない能力の劣った者のための教えと位置づけられ、代表的な大乗経典群の中でも下位に置かれてきました。釈尊以来、仏教は出家仏教（大乗菩薩道）を本流（母屋）として、浄土経典は落ちこぼれ難民救済の支流（テント小屋）の位置づけだったわけです。日本仏教に到って浄土教は法然上人（浄土宗）によって独立を果たすのですが、法然上人・親鸞聖人の仏教表現にもなお修行仏教コンプレックスは影を落としています。その位、釈尊仏教＝修行仏教という固定観念は、釈尊後続の求道者たちの観念を支配して来たのです。未だにこの支配の鎖は真宗学においてさえ解かれてはいません。世界宗教への道を閉ざし、浄土真宗をサナギのまま枯死させようとしている真犯人は、真宗学です。先人の解読・知識の踏襲に終始して、答えを覚えれば足る仏教、経典深部のブラックボックスを自ら思索し解読することを放棄した集団依存症の怠慢仏教です。

『大経』のそもそもの出現理由は、修行仏教の支配構造を見破り完全に見切りをつけたある集団の出現だったのでしょう。阿弥陀如来の本願を衆生救済の出発点としたのです。修行仏教は「人間から仏へ」と、人間を出発点にします。言い方を替えるならば、「人間から→絶対無限の永遠へ」という道順です。しかし、『大経』の文章構成をよく検討すると、『大経』は「阿弥陀如来から人間へ」、「絶対無限の永遠から→今ここのわたしへ」という構造が全場面に統一されています。「衆生救済の完成から→無差別無媒介に→わたしへ」という革命的な悟りです。

Ａ列：阿弥陀如来　と　Ｂ列：わたし　　対応表

第一表	Ａ列	還相回向	極楽浄土	阿弥陀仏	絶対	無限	独立	唯一	全体	完全	永遠
	Ｂ列	往相回向	娑婆世界	一切衆生	相対	有限	依存	多数	部分	不完全	生死無常

第二表	Ａ列	不可思議	非対象智	超個我	超時間	超空間	超因果	自由	本質	海	言語の故郷
	Ｂ列	思議分別	対象智	個我	時間	空間	因果	束縛	属性	魚	言語へ帰順

『大経』も『教行信証』も『正信念仏偈』もその全体の絵姿の背骨（センターライン）は弥陀の名号（南無阿弥陀仏）です。見事な一貫性です。仏教の個々の言葉に惑わされて、言葉の森に入って木ばかり見て山全体の姿が見えない、森のどこに今自己がいるのか自己の所在地が分からない、霧中闇路の救われない学び、喜びのない聞法者がなんと多いことでしょう。僧侶の責任です。

浄土真宗の本領は世界宗教であって、宗派仏教ではありません。キリスト教にも禅仏教にも、「還相回向・往相回向」の言葉づかいはありませんが、宗教である限り「死を超越した永遠と自己の解決」がなくては完成された宗教とは言えません。その関係に死という区切りの壁を固定し、死の壁を超えて浄土に生まれていくのが「往相」、死後の浄土から現世に還って来るのが「還相」としたのは蓮如上人ですが、同時代への配慮があったのでしょうが、時計は今も止まったままです。浄土（永遠）は死後に置かれたままになってしまいました。これでは浄土真宗は現代から取り残されて自滅していくほかありません。何故なら虚無に引き込まれていく現代人の空疎な今が置き去りにされてしまったからです。『大経』の出現理由を現代的に解かんとするには、現代の宗教哲学の視座が必要なのです。『大経』の文章構成と言語は、他の大乗経典とは完全に異次元です。対応表のＡ列（横並び）で示した言葉はすべて「還相　ＡからＢへ」を示します。Ｂ列（横並び）の言葉は、迷いに苦しむ人間存在が救いを求める「往相　ＢからＡへ」を示します。

ここで「還相回向」・「往相回向」という時の「回向」の言葉づかいですが、『大経　巻上』では第２０願の願文に、『大経　巻下』では冒頭の「本願成就文」とほか２箇所に出てきますが、特に重要なのは「本願成就文」です。法然上人までは「至心に回向して」と読み下していた「至心回向」を、「あらゆる衆生、その名号を聞きて信心歓喜せんこと、乃至一念せん。至心に回向したまへり。かの国に生れんと願ずれば、すなはち往生を得、不退転に住せん。ただ五逆と誹謗正法とをば除く」と親鸞聖人は読まれました。阿弥陀仏の名を聞いて信じる心もよろこぶ心も人間から発動して如来におそなえできるものではなくて、その心さえも如来から賜っている本願力回向の功徳なのだと受けとられたのです。漢文読み下しの常套からすると親鸞聖人の読みは異例のテクニックだということになるでしょう。しかし、浄土真宗の本願力回向（他力回向）の根本地平はこの「本願成就文」の読みにかかっています。わたしは大きく有り難く肯きます。しかし、これで宗門人の教化は出来ても、世界の異教徒へは伝道できないでしょう。親鸞聖人に『大経』解読の眼をいただき、もう一度、いえ何十年でも毎日考え続けるならば、『大経』全体が「絶対無限から相対有限へ」、「阿弥陀如来の本願から衆生の救済へ」という回向の構造であることが随所に確認できます。４８願文の前段の「讃仏偈」でも結び４行は、「たとひ身をもろもろの苦毒のうちに止くとも、わが行、精進にして、忍びてつひに悔いじ」となっています。「身」とは阿弥陀如来のこと、「苦毒」とは煩悩に沈むわたしのことです。如来は、わたしの知らないわたしの泥の底までも降りると誓っておられるのです。『大経　巻上』の結びは、「かくのごときの諸仏、各々に無量の衆生を仏の正道に安立せしめたまふ」です。「各々安立・かくかくあんりゅう」、独りひとりの宿業実存の具体（Ｂ列）を、今の独りひとりそのままに仏の救いの真ん中に抱き、しずかに安らかに許して立たしめる。安心立命の境地をあたえ、この身を満足心にいざない、この心の不安を晴らしていく衆生救済の極致は、ただ「降りてこられて声と成られた永遠＝南無阿弥陀仏」（Ａ列）の称名念仏(往還回向ＡＢ表裏一体)であるということです。「第一表」は清澤満之の著書『宗教哲学骸骨』の宗教構造、「第二表」は、鈴木大拙と大峯顯言語論の体温から嗅ぎ取って記述しました。「第二表」の最終決戦の舞台は、「なぜ名号は救いか」の「現代言語論＝言語誕生の故郷」です。「言葉とは何か」の言語論を回避しては、名号の復権はありません。永く固く乾きすぎてしまった旧態依然のサナギの殻を破り、浄土真宗が世界宗教としてダイナミックに蘇生することはありません。如来そのものである「声と成られた永遠＝南無阿弥陀仏＝名号」のことを、三木清は「言葉の言葉」といい、妙好人・浅原才市は体温のある活動体の仏様「こゑのこゑ」と言いました。Ａ列とＢ列の間に死の壁の隔てはありません。絶対無限に入口や出口の境界があろうはずがありません。今ここもその中、一瞬一瞬は往還回向の永遠の呼応です。『大経』を今一度読み解いてみませんか。

第二表	Ａ列	不可思議	非対象智	超個我	超時間	超空間	超因果	自由	本質	海	言語の故郷
	Ｂ列	思議分別	対象智	個我	時間	空間	因果	束縛	属性	魚	言語へ帰順